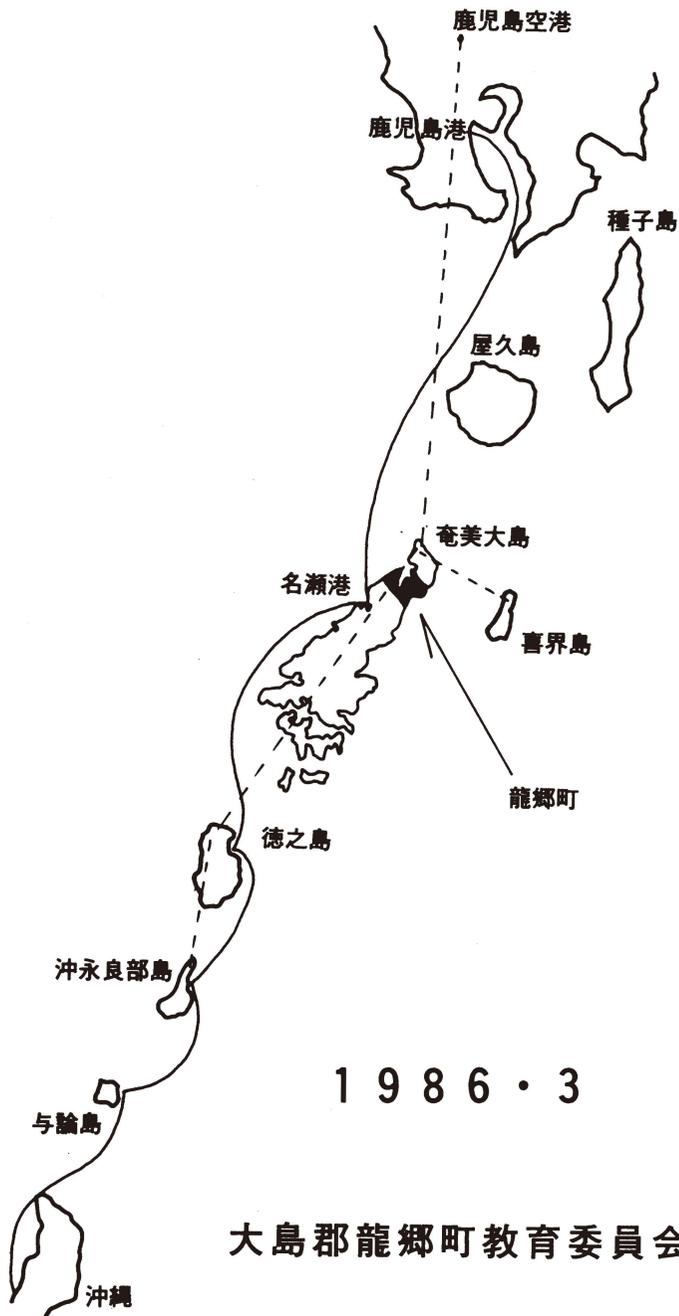


龍郷町の埋蔵文化財

分布調査報告書



大島郡龍郷町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財の宝庫として知られ、その分布は町内全域に広がっていると思われます。しかし、近年の日本全土における急激な経済発展の波が奄美各地にも及び、至る所で開発事業が急ピッチで進められつつあり、これに伴って埋蔵文化財の崩壊の危険性も高まりつつある現状にあります。

ところで、埋蔵文化財は人間だけが持つ縦とのつながり、つまり、祖先とのパイプ役を果たす絶対的な価値を持つものであります。そして、これにより私達は、我々の祖先との会話ができ、それを踏み台として新しい文化の創造も可能になるものと思ひます。

このような埋蔵文化財の置かれている現状と価値を考え、我々の祖先の残した貴重な財産を保存し、守っていくことが我々に与えられた任務であるという認識に立ち、その最も基本となる分布調査を行うことが急務であるという観点から、県の文化課に依頼して「埋蔵文化財の分布調査」を実施したものであります。

今後、この分布調査の結果を最大限に尊重し、町民の「埋蔵文化財」に対する価値観と認識を高めることにより、文化財を保存・保護していかうとする積極性を期待するものであります。

昭和61年3月31日

龍郷町教育委員会
教育長 濱田好一

例 言

1. この報告書は、龍郷町教育委員会が実施した龍郷町の埋蔵文化財の分布調査報告書である。
2. 調査の組織は、調査の経過の中で記載した。
3. 本調査において、県文化財保護審議会委員河口貞徳・笠利町立歴史民俗資料館中山清美の両先生に御指導をお願いし、有益な教示と助言を受けた。
4. 本書での本町管内の遺跡は、順不同である。
5. 本書で使用した地形図は、龍郷町所有のものを使用した。
6. 本書の執筆・編集は、立神が担当した。

目 次

序 文 例 言

第1章 調査の経過…………… 2	第3節 龍郷地区……………12
第1節 調査に至るまでの経過…………… 2	第4節 安木屋場地区……………14
第2節 調査の組織…………… 2	第5節 円地区……………14
第3節 調査の経過…………… 2	第6節 嘉渡地区……………14
第2章 龍郷町の位置及び環境…………… 5	第7節 戸口地区……………16
第3章 遺跡の概要…………… 7	第8節 浦地区……………16
第1節 赤尾木地区…………… 7	第4章 む す び……………19
第2節 芦徳地区……………12	

挿 図 目 次

第1図 龍郷町遺跡分布図（全体図）…………… 6
第2図 赤尾木地区遺跡分布図…………… 8
第3図 芦徳地区遺跡分布図……………10
第4図 龍郷地区遺跡分布図……………11
第5図 安木屋場地区遺跡分布図……………13
第6図 円地区遺跡分布図……………15
第7図 嘉渡地区遺跡分布図……………17
第8図 遺跡の遺物実測図……………18

図 版 目 次

図版1 遺跡地の遠景及び近景	
1. 半川遺跡, 2. ウギヤウ遺跡, 3・4. 瀬連Ⅰ・Ⅱ遺跡	
5. 瀬連Ⅰ遺跡, 6. 瀬連Ⅱ遺跡, 7. 前間遺跡, 8. 白間遺跡	
……………	20
図版2 遺跡地の遠景, 近景, 出土遺物	
1. 中里遺跡, 2. 外金久遺跡, 3. 三岸遺跡, 4. 円金久遺跡	
5. 里遺跡, 6. 円金久遺跡, 7. 平木山遺跡, 8. フージャバ	
ル遺跡……………	21

第 1 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

龍郷町では、町指定名勝天然記念物の手広遺跡の消失により、先史時代の実態を把握し、公表して文化財保護の認識を深めるために、昭和60年4月から5月にかけて、埋蔵文化財分布調査等について、県教育庁文化課・県大島教育事務局と今後の方策についての協議を実施した。その結果、6月には、分布調査に伴う予算を計上し、議会の承認を得て、町内の埋蔵文化財の分布調査を計画した。

埋蔵文化財分布調査は、昭和60年12月、県教育庁文化課に職員派遣依頼を行い、昭和61年2月17日から2月22日までの6日間に於いて調査を実施した。

第 2 節 調査の組織

調査主体者	龍郷町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	濱田好一
調査 事務	〃	社会教育課長	重原義和
〃	〃	社会教育補佐	碓山幾郎
〃	〃	派遣社教主事	池山修弘
調査担当者	県教育庁 文化課	主 査	立神次郎
〃	〃	〃	弥栄久志

尚、調査・企画においては、県教育庁文化課長桑原一廣氏、同埋蔵文化財担当主任文化財研究員向山勝貞氏、調査においては、県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、笠利町歴史民俗資料館中山清美氏、町文化財保護審議会委員奥田純夫氏、同・中田一男氏、同・重村好郎氏、同・武義辰氏、同・石崎公曹氏の指導・助言を受けた。整理作業は、相良政子氏の協力を得た。深謝の意を表したい。

第 3 節 調査の経過

本町の埋蔵文化財は、ウフタ遺跡、手広遺跡、赤尾木保育所遺跡などが周知されている。その後、奄美考古学研究会（代表中山清美）等により、アオン遺跡、平木山遺跡、フージャバル遺跡、嘉渡Ⅰ・Ⅱ遺跡等が確認されている。しかし、開発事業等の影響を受けているのが現状である。そこで埋蔵文化財の実態を把握するために、今年度、町内の埋蔵文化財の分布調査を計画し、調査は、昭和61年2月17日から2月22日まで実施した。調査の経過については、以下、日誌抄により略述する。

2月17日（月） 調査方法、日程、町内の埋蔵文化財についての打ち合せ及び概要説明、基本的には悉皆調査による。調査は17日から22日まで現地調査を実施し担当職員（社会教育課員）と町文化財保護審議会委員1名があたる。周知の遺跡に

ついて説明。特に、東海岸に於いては、笠利町と同様であり東海岸では、サウチ遺跡のように独立した所にも認められる。グスクについては、数か所で確認してあるが、今回は埋蔵文化財を中心に実施する。調査は東海岸の赤尾木地区から実施し、根原地区、加世間地区、芦徳地区、里地区、蒲田地区、瀬留地区、久場地区、龍郷地区、安木屋場地区、円地区、嘉渡地区、秋名地区、戸口地区、中勝地区、大勝地区、浦地区へと計画をたてる。赤尾木地区、竜神崎遺跡（仮称）は、県道（現地調査）——赤尾木地区、竜神崎（仮称）は、県道の両側に遺物散布地や遺物包含層を確認する。土器破片、貝類、磨製石斧などを採集し、土器は小破片のため時期は不明である。ウフタ遺跡は、周知の遺跡で調査が実施され、現在では宅地や蘇鉄の植樹がなされている。ウギヤウ遺跡は、社会福祉法人星の園南側に隣接した砂丘地の畑地及び防風林を含む地域が推定される。土器小破片が多いが、中には面縄西洞式土器破片も見られる。石器として、磨製石斧、研磨器などを採集した。

2月18日（火） 赤尾木残地区（東海岸・西海岸）、根原地区、加瀬間地区、蒲田地区、芦徳・長浜地区において調査を実施。手広遺跡は、町指定の文化財であったが、昭和51年（1976）に一部、昭和60年（1985）には調査終了地区以外が破壊された。昭和51年には、奄美考古学研究会が、昭和58年（1983）には、熊本大学により発掘調査が実施されている。今回、町道手広一小泊線改良工事中の断面に遺物包含層を確認する（朝ノ海別荘側）。赤尾木保育所遺跡は、周知の遺跡である。特に、周辺地区の調査では、荒地のため調査不能地が多かったが、貝類の散布をみた。芦徳・長浜地区において、2か所の遺物散布地及び遺物包含層を確認した（瀬連Ⅰ・Ⅱ遺跡）。

2月19日（水） 瀬留地区、久場地区、阿丹崎地区、龍郷地区、鯨浜地区、安木屋場地区、秋名地区、嘉渡地区、円地区、宇天地区、芦徳地区において調査を実施する。龍郷地区において2か所の遺物散布地を確認した。龍郷Ⅰ遺跡（仮称）は、龍郷カトリック教会付近を含めた集落内にあり、土器や貝類などを採集した。龍郷Ⅱ遺跡（仮称）は、龍郷小学校付近の集落内にあり、土器破片や貝類の散布があり、溪流や土石流のためか二次堆積の影響が認められる。安木屋場Ⅰ遺跡（仮称）は、集落の西端にある畑地に位置し、土器破片や貝類などの散布を確認したが、土器は小破片のため時期は不明である。安木屋場Ⅱ遺跡（仮称）は、集落内へ入り込む県道西側沿いの宅地内の畑地にあり、ともに砂丘地に位置している。円遺跡（仮称）は、周知の遺跡であり、円集落の東端に位置する宅地内にある。類須恵器の完形品、磨製石斧などが池掘削中に出土している。嘉渡には、2か所に遺跡地を確認した。嘉渡Ⅲ遺跡（仮称）は、集落内の宅地において、青磁破片や土器破片を採集した。嘉渡

IV遺跡（仮称）は土器破片を少量採集している。その他、周知の遺跡として小前勝遺跡・嘉渡Ⅱ遺跡があり、小前勝遺跡より磨製石斧が採集されている。

2月20日（木） 戸口地区、田雲地区、中勝地区、大勝地区、加瀬間地区、浦地区について調査を実施する。アオン遺跡は、周知の遺跡であり、戸口の集落より北東の海浜の砂丘地にあったが、現在では砂採取事業により消失している。平木山遺跡は、周知の遺跡であり、戸口小学校北側高台のマージ層の畑地内に位置し、青磁、白磁、類須恵器などが採集されているが、現在では荒地となっている。戸口・中勝・大勝地区の平野部は、ともに土石流や溪流のために二次堆積層と判断した。

2月21日（金） 各地区ともに悉皆調査が一応終了したために、補充調査を実施する。県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、県教育庁文化課向山勝貞氏とともに調査（22日まで）に参加（指導・助言）。赤尾木地区より確認された遺跡について、範囲やその周辺地域の補充調査を実施する。龍郷地区において、龍郷Ⅲ遺跡（仮称）は、田畑家の墓地やの隣接の教財天の敷地、旧県道沿いの宅地内にあり、土器破片、青磁、貝類などが散布している。

2月22日（土） 龍郷地区、戸口地区、浦地区について、補充調査を実施する。戸口地区には、平木山遺跡があり、青磁などが採集されている。浦地区にはフージャバル遺跡があり、宇宿下層式土器が採集されている。分布調査は、本日をもって終了。

尚、整理作業は、文化課重富収蔵庫において実施した。

第 2 章 龍郷町の位置及び環境

奄美大島は、鹿児島県の南部から台湾にかけて弧状に連なる南西諸島のほぼ中央に位置している。本島は、5つの島から成る奄美大島の中でも最も大きい島であり、沖縄本島、佐渡ヶ島につぐ島で、一般に地勢は急峻である。この島の南部では、かつて山地が沈降し、汀線はリアス式海岸を形成している。しかし、北西部は隆起傾向を示し、特に笠利半島の東側のおだやかな台地状を呈している。

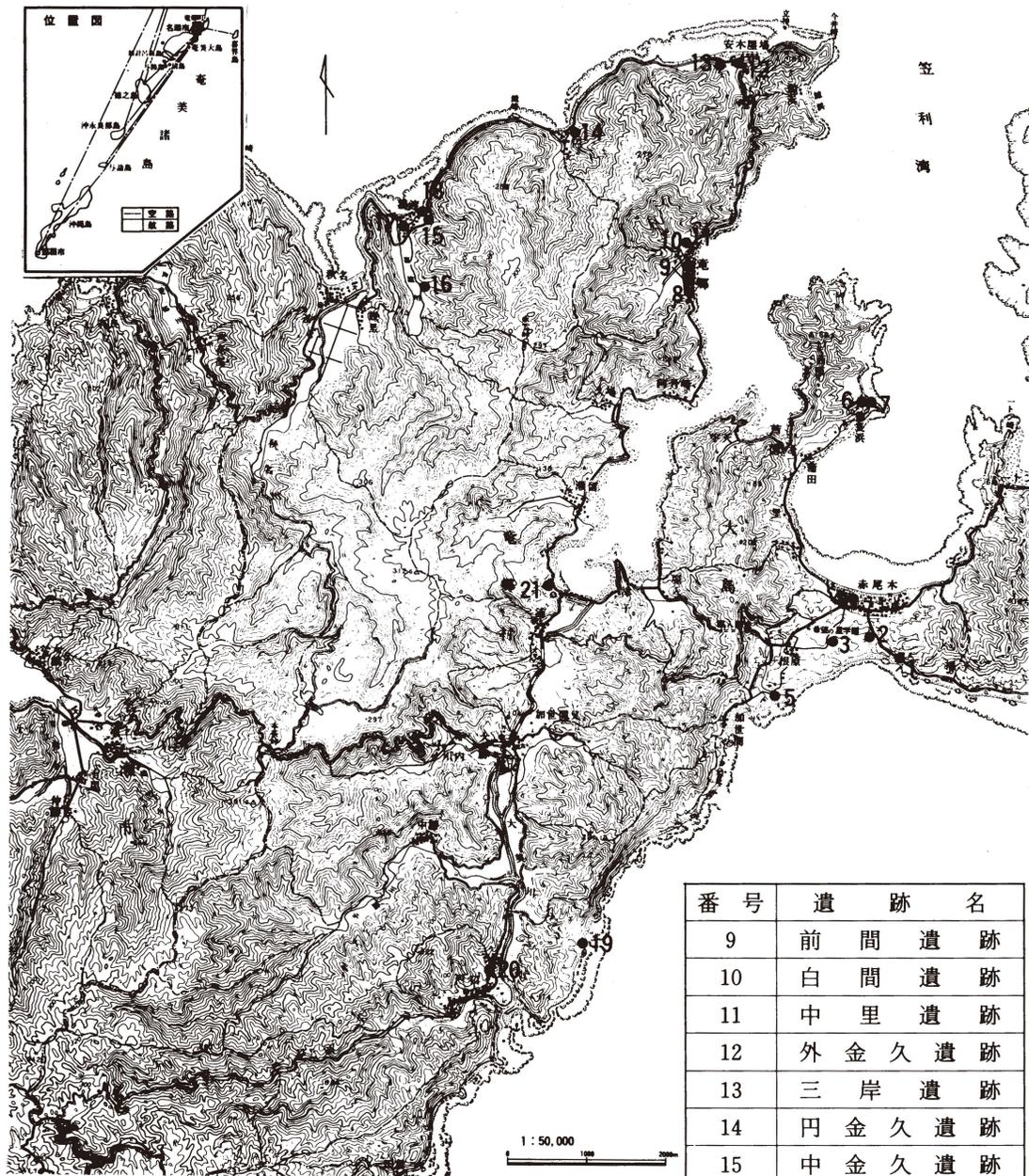
龍郷町は、鹿児島県本土から南西380kmに点在する大島諸島の本島の北部に位置し、東経12度35分、北緯28度25分の地において、西南部は南北に急峻な長雲山脈と十五山系が連なり名瀬市と隣接し、陸地は赤尾木地峡を径て、同じく笠利町に隣接している。また東南部は太平洋に面し、西北部は東シナ海に望んでいる。

本町の土地利用は、山林が総面積8,342haのうち6,324haを占め、耕地は赤尾木平野が最も広く、戸口から大勝を径て浦に至る中部平野と秋名平野がこれに次ぎ、他は小面積の耕地が山峡や海浜に点在している。主な河川は、秋名川・嘉渡川が北流し東シナ海に、大美川が太平洋に流入している。

気候は、亜熱帯海洋性で四季を通じて温暖多湿で、台風の常習地帯でもあり、季節風は夏と冬に著しくなる。

奄美大島は、文永3年(1266)から慶長14年(1609)まで、約340年間、琉球の統治下にあった。慶長14年、島津藩の沖縄征伐の結果、大島諸島は琉球から分割され、以後、廃藩置県に至るまで薩摩藩の統治下におかれた。明治41年(1908)、龍郷方と有良・芦花部を除く瀬名方に、赤木名方の赤尾木・芦徳を編入して龍郷村となる。大正9年(1920)、本土並みに町村制が施行されたが、行政区画の変動はなかった。その後、第二次世界大戦の終結にともない、昭和21年(1965)の連合国覚書により日本との行政権が分離され、日本に復帰するまでの8年間は米国の軍制下に置かれ、同年12月25日、日本復帰が実現した。昭和50年(1975)に町制を施行し、大字に秋名・幾里・嘉渡・円・安木屋場・龍郷・瀬留・浦・屋入・大勝・中勝・戸口・赤尾木・芦徳などがある。

本町の埋蔵文化財には、ウフタ遺跡、手広遺跡、赤尾木保育所遺跡などが周知され、このほか、奄美考古学研究会等により、アオン遺跡、フージャバル遺跡、平木山遺跡・嘉渡遺跡などが周知されている。これらの遺跡のうち、フージャバル遺跡は、マージ層に立地している遺跡である。ウフタ遺跡、手広遺跡、アオン遺跡は、笠利町と同様に東岸の遺跡と時期及び立地が類似し、東海岸以外では、サウチ遺跡(笠利町)のように独立したところにも認められる。また町の指定文化財には、史跡として、西郷南洲流謫跡(県)、無形民俗文化財として、平瀬まんかい(県)、泥染による大島紬竜郷柄の技法(町)、記念物として、ハヤ(町)、名勝天然記念物として、奇岩群、サキシマスオウの木、デイゴの木、西郷松、千年松、仏像墓、手広遺跡などがある。



番号	遺跡名
9	前間遺跡
10	白間遺跡
11	中里遺跡
12	外金久遺跡
13	三岸遺跡
14	円金久遺跡
15	中金久遺跡
16	小前勝遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	半川遺跡	5	手広遺跡	17	里遺跡
2	ウフタ遺跡	6	瀬連Ⅰ遺跡	18	嘉渡Ⅱ遺跡
3	ウギヤウ遺跡	7	瀬連Ⅱ遺跡	19	アオン遺跡
4	赤尾木保育所遺跡	8	龍郷金久遺跡	20	平木山遺跡
				21	フージャバル遺跡

第1図 龍郷町遺跡分布地図

第 3 章 遺 跡 の 概 要

第 1 節 赤尾木地区

赤尾木地区には、半川遺跡・ウフタ遺跡・ウギヤウ遺跡・赤尾木保育所遺跡、手広遺跡等があり、ウフタ遺跡・赤尾木保育所遺跡・手広遺跡などは、周知の遺跡である。特に、手広遺跡やウフタ遺跡については、発掘調査が実施されている。

1. 半川遺跡

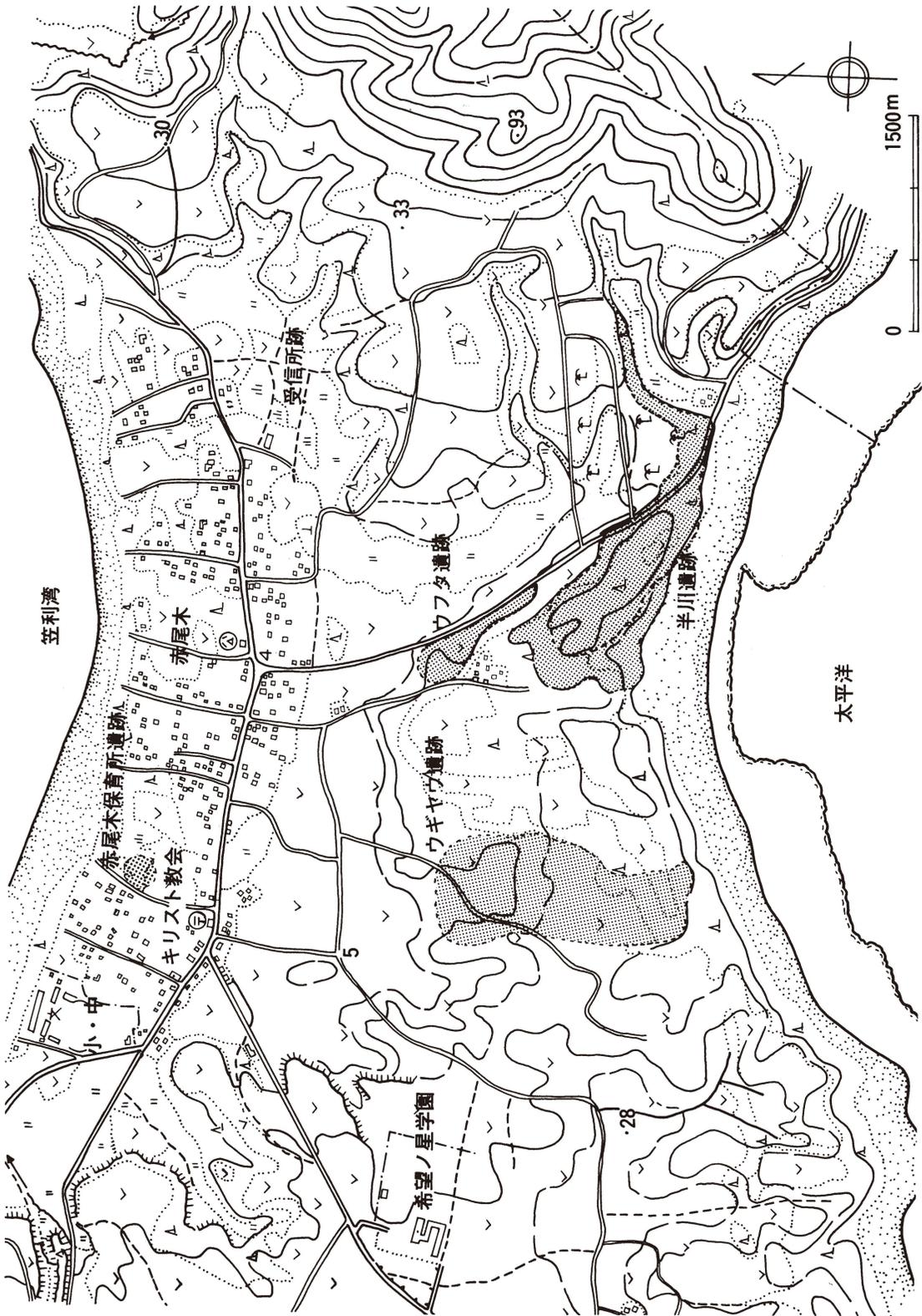
本遺跡は、龍郷町赤尾木1,281, 他にあり、笠利半島の基部の砂丘上に位置し、その基部は地峡部を呈し、その距離は1 km弱にすぎない。遺跡の東側は笠利町との町境で、西側は赤尾木の集落となり、南側はそく海浜となり、遺跡地内を県道万屋―赤尾木線が南東から北西方向へ走っている。その県道の北側沿いには、遺物包含層が露呈し、土器破片や貝類を検出した。土器は、小破片のために時期については不明である。その他、本遺跡からは貝類や磨製石斧などを採集した。1は磨製石斧で頁岩製の片刃の石斧であり、基部は欠損し、刃部は小さい刃こぼれが観察できる。

2. ウフタ遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,328―8, 他にあり、半川遺跡より北西へ約200mの県道万屋―赤尾木線西隣なりの砂丘地の宅地及び畑地に位置している。遺跡の北側は、赤尾木の集落が近く、西側は、バンガロー跡地や社会福祉法人星の園がある。遺跡は、本町が事業主体となり、昭和56年(1981)7月に熊本大学により発掘調査が実施されている。遺構は、掘り込み遺構2基が検出されている。遺物は、土器や石器が出土した。土器は、縄文時代後期から弥生時代に相当する時期のものが見られている。これらの土器は、条痕文土器、面縄前庭式土器、嘉徳Ⅱ式土器、面縄西洞式土器、夜臼式土器、縄文時代晩期後半相当、弥生時代中・後相当などが出土している。石器は、石斧、凹石、クガニイシ、砥石、石鏃、スクレイパー、楔形石器、使用痕のある剝片、石核などが出土している。^{注4}

3. ウギヤウ遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,399, 1,400, 1,402―2, 他にあり、笠利半島の基部、赤尾木地峡部のほぼ中央付近から西部にかけての砂丘上の畑地及び防風林を含む地域が推定される。遺跡は、社会福祉法人星の園の西側に位置し、周辺では砂採取事業が進行中である。遺物は、砂丘上の畑地に散布しており、一部の畑地においては重機により表土が剝がれ、その一部に遺物包含層が露呈している。遺物には、土器破片や石器などが見られ、土器は小破片が多く、中には面縄西洞式土器がある。石器には、磨製石斧、研磨器等が見られる。1・2は、面縄西洞式土器で、3・4は、面縄西洞式土器系の土器破片と考える。5は、磨製石斧で刃部付近のみで、その大半が欠損している。6は、凹石で半分以上が欠損し、周縁には敲打痕を残してい



第2図 赤尾木地区遺跡分布図

る。片側中央付近には凹部を残し、磨石からの転用が考えられる。7は、砂岩製の研磨器で、不定形の表材を利用し、五面に溝状の凹部を作り出している。

4. 赤尾木保育所遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木232-1、他にあり、赤尾木の集落内の砂丘地に位置している。遺跡は、赤尾木保育所を含むその周辺地域が推定されるが、今回の調査においては、周辺地域が調査不能地のため遺物の散布を確認することはできなかった。しかし、数点の貝類を採集した。以前、この保育所内より類須恵器、兼久式土器などが出土している。

5. 手広遺跡

本遺跡は、龍郷町赤尾木1,730, 1,731、他にあり、赤尾木地峡部の西南基部で、国道58線の根原バス停付近からのびる町道大美-赤尾木線の手広川橋付近の太平洋沿岸に形成された小規模な海岸砂丘地に位置している。

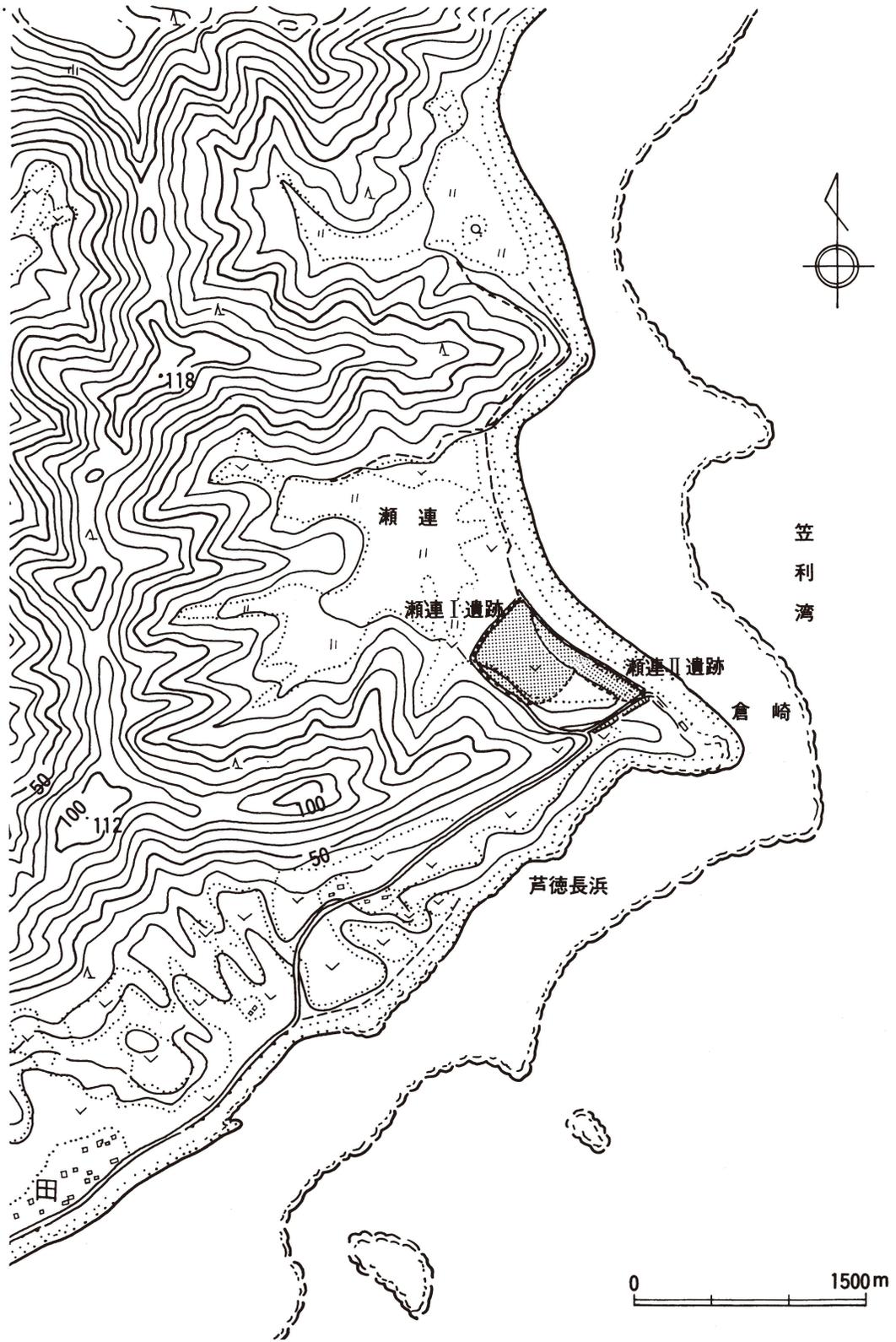
遺跡は、昭和54年(1979)12月に町の名勝天然記念物に指定されているが、以前の昭和51年(1976)に一部、昭和60年(1985)には、本町が調査主体となり、熊本大学により調査を実施し、調査の結果、7文化層を確認している。遺構としては、弧状配列ピット(第1文化層)、石組遺構(第3文化層より3基、第6文化層より1基)、集石遺構(第3文化層第7文化層)などを検出し、第3文化層で検出した1・2号石組遺構は、住居跡が推定され、第1文化層から遺構は、平地式住居跡と思われる、兼久式土器の時期における初例である。土器としては、第1文化層(兼久式土器)、第2文化層(刻目突帯文類似土器、板付類似土器、丹塗磨研壺形土器、外耳土器、台付土器)、第3文化層(リボン突起をもつ土器、長頸磨研壺形土器、尖底をもつ土器、台付土器、丹塗磨研壺形土器)、第4文化層(カヤウチバンタ式類似土器、外耳土器)、第5文化層(宇宿上層式土器、喜念I式土器、条痕文土器、黒色磨研土器)、第6文化層(面縄西洞式土器、浅鉢形土器、壺形土器、外耳土器)、第7文化層(嘉徳I・II式土器)などが出土し、第2文化層は、刻目突帯文類似土器・丹塗磨研壺形土器などの存在により、弥生時代前期に相当する。第5文化層は、縄文時代晩期前半に相当すると思われる、黒色磨研土器、条痕鉢形土器も、この時期に該当する。第7文化層から出土した嘉徳I・II式土器は、縄文時代後期後半に比定されるとの報告がなされている。この他に、石器、貝製品、骨製品などが出土している。
注5

第2節 芦徳地区

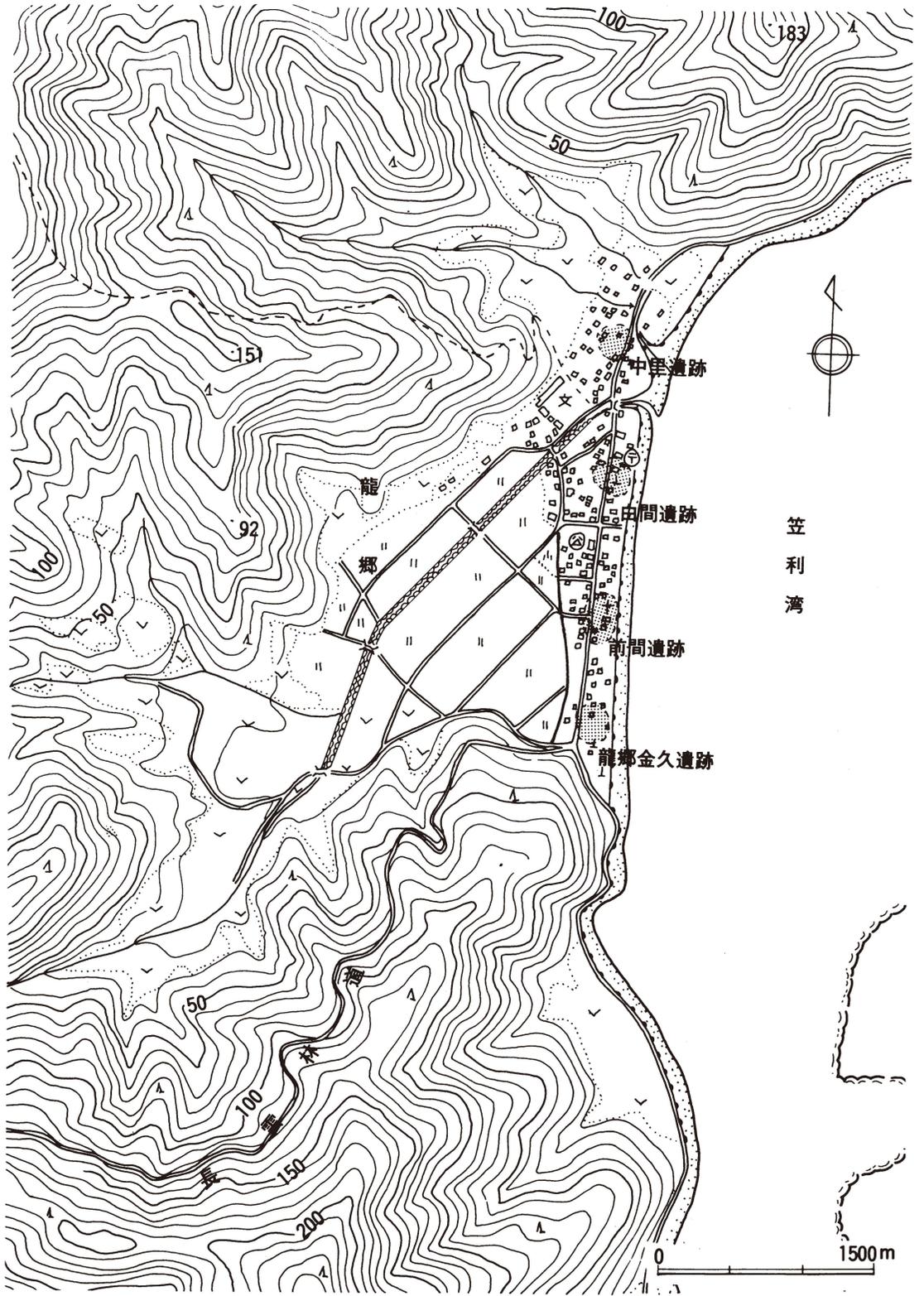
芦徳地区には、瀬連I遺跡、瀬連II遺跡がある。

6. 瀬連I遺跡

本遺跡は、龍郷町芦徳954、他にあり、役場より直線で北東に約4.5kmの地点で、笠利湾に細長く突き出した半島の東側中央付近の砂丘地にあり、現在周辺地域は、水田地帯となってい



第3図 芦徳地区遺跡分布図



第4図 龍郷地区遺跡分布図

る。遺跡地は、蒲田からのびる町道芦徳―長浜線の終点付近の砂丘地の畑地にあり、土器や貝類の散布が多く、土器破片は器壁が薄い胎土は良好である。数十年前に所有者の家族が貝製の装飾品を採集したが、現在では散逸して不明である。

7. 瀬連Ⅱ遺跡

本遺跡は、龍郷町瀬連979、他にあり、瀬連Ⅰ遺跡に隣接した砂丘地に位置している。遺跡は、瀬連Ⅰ遺跡より海浜に近く、標高は4から5m程度である。瀬連Ⅰ遺跡とは、小川により分離した。今年度、町道終点付近から倉崎にかけて新設道が建設され、その断面に遺物包含層が露呈し、土器破片や貝類を検出した。1は、面縄西洞式土器系の土器破片と考えられる。

第3節

龍郷地区には、龍郷金久遺跡、前間遺跡、白間遺跡、中里遺跡などがある。

8. 龍郷金久遺跡

本遺跡は、龍郷町龍郷にあり、龍郷集落の南端の現県道と旧道との集落内に位置している。これらの集落は、地形に制約された砂丘地にあり、先史時代の遺跡も同じような環境にあった事が知られよう。遺跡の範囲については、集落内の宅地にあるために定かでない。採集された遺物には、兼久式土器、類須恵器の破片などがある。

9. 前間遺跡

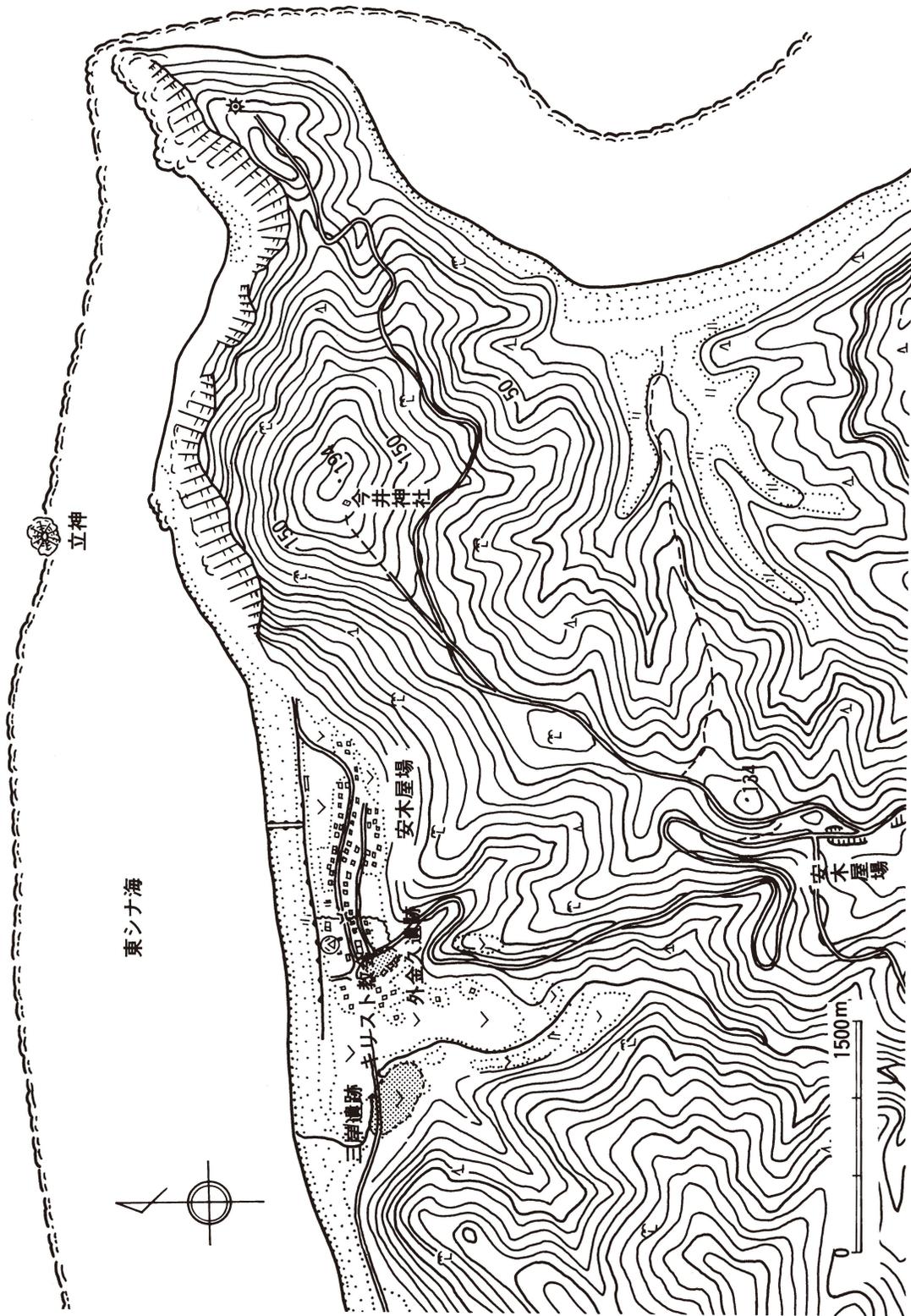
本遺跡は、龍郷町龍郷124、125、128、129、他にあり、龍郷カトリック教会付近の集落内にあり、その範囲については宅地内のために不明である。遺跡は、龍郷金久遺跡と同様に砂丘地に形成された遺跡で、遺跡地に今日の集落が立地し、土器破片や貝類の散布が見られる。土器破片は、小破片のために時期については不明であり、遺跡の範囲についても宅地内のため不明だが、その環境から広範囲に及ぶものと考えられる。

10. 白間遺跡

本遺跡は、龍郷町龍郷172、他にあり、田畑家墓地やその隣接する勉財天の敷地、旧県道の反対側の宅地内に位置し、その範囲は広範囲に及ぶものと考えられる。さらに、西郷隆盛が安政6年(1859)から文久2年(1862)までの3年余にわたり過ごした南洲流譚跡付近においても青磁の底部破片を採集した。採集遺物には、土器破片や青磁破片などがある。この遺跡も同様に砂丘地に宅地が密集しているために、遺跡の範囲は不明である。1から3は、青磁の破片で15世紀頃の時期が考えられる。

11. 中里遺跡

本遺跡は、龍郷町1,548、1,549、にあり、龍郷小学校付近で、龍郷の北部集落の宅地に位置



第5図 安木屋場地区遺跡分布図

している。この遺跡も宅地内に位置しているために、遺跡の範囲については不明である。散布遺物は、土器破片や貝類などが認められたが、土器は小破片のために時期についても不明である。

第4節 安木屋場地区

安木屋場地区には、外金久遺跡、三岸遺跡がある。

12. 外金久遺跡

本遺跡は、龍郷町安木屋場2,459、他にあり、龍郷町の最北端の集落内に位置し、主要地方道名瀬一竜郷線の安木屋場バス停付近の砂丘地の畑地及び宅地内にある。遺跡の範囲については宅地内にあるため不明である。遺物は、土器破片や貝類が認められるが、量はそれほど多くない。

13. 三岸遺跡

本遺跡は、龍郷町安木屋場2,808、他にあり、外金久遺跡より東へ約200mの砂丘上の畑地に位置している。遺跡は、安木屋場の集落の東端部で、主要地方道名瀬一竜郷線南沿いの畑地で、遺物は土器破片や貝類の散布が認められた。1は、面縄西洞式土器類似破片と思われるものもあるが、小破片のため不明である。その他の遺物は、大半が小破片のために時期不明である。

第5節 円地区

円地区には、円金久遺跡があり周知の遺跡である。今回の調査により、その周辺で遺物の散布を確認した。

14. 円金久遺跡

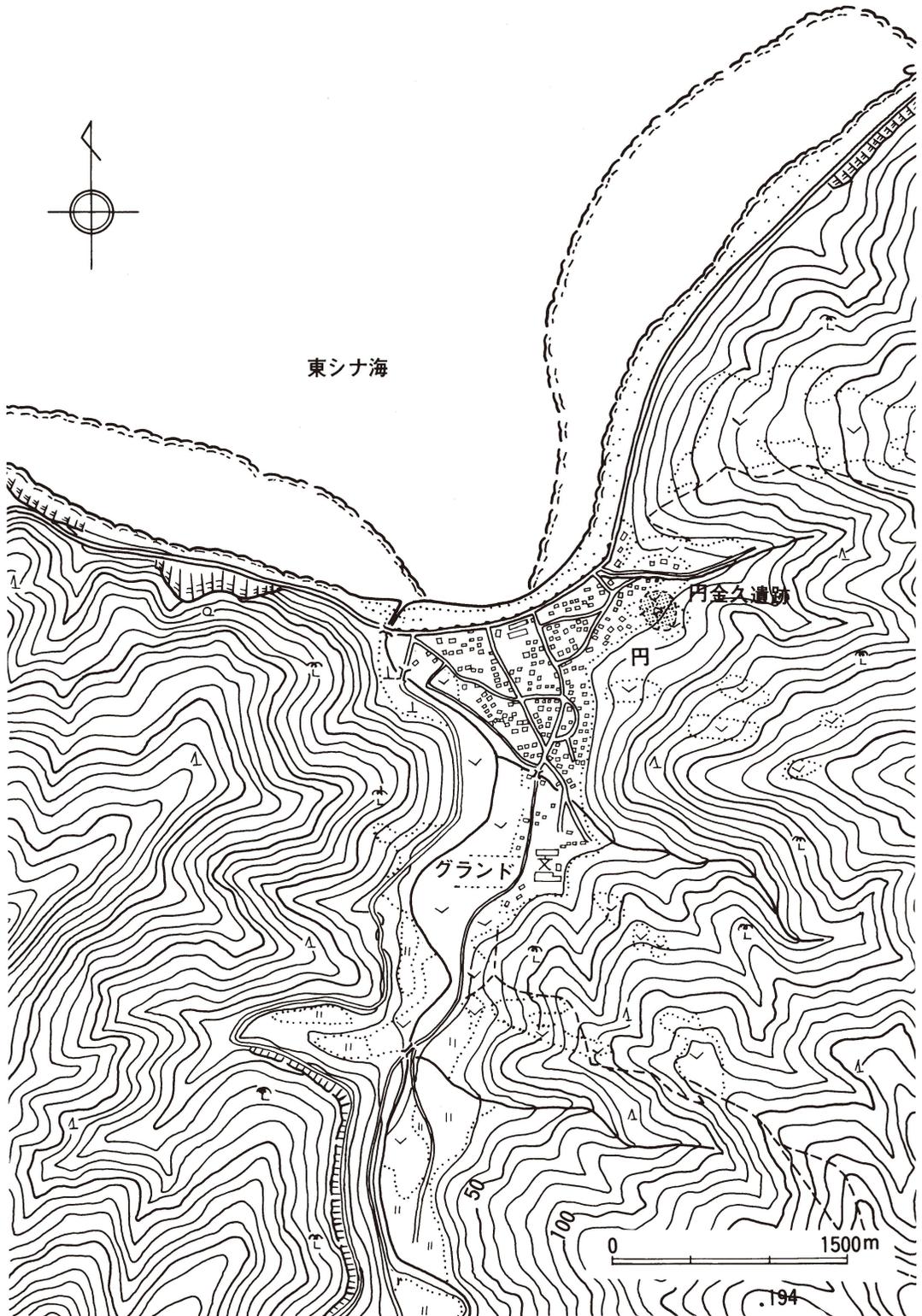
本遺跡は、龍郷町円425、426、428、他にあり、円集落の東端の宅地内に位置している。昭和44年（1969）、宅地内に池を掘削していたら表土より約50cmぐらいの所より、類須恵器の完形品、土器破片、磨製石斧等が出土したが、層位的な前後関係は不明である。今回、その周辺地域の調査を実施し、土器小破片の散布を確認した。この遺跡は、宅地内にあり現在では階段状に宅地化されている。また遺跡の範囲についても不明である。

第6節 嘉渡地区

嘉渡地区には、中金久遺跡、小前勝遺跡、嘉渡金久遺跡があり、小前勝遺跡、嘉渡Ⅱ遺跡は、周知の遺跡である。

15. 中金久遺跡

本遺跡は、龍郷町嘉渡446-2、他にあり、主要地方道名瀬一竜郷線の南沿いの畑地に位置している。遺物の散布量は少ないが、土器破片の散布が認められる。



第6図 円地区遺跡分布図

16. 小前勝遺跡

本遺跡は、龍郷町嘉渡小前勝1,210～1,228, 他にあり, 主要地方道名瀬一竜郷線の嘉渡の集落よりのびる町道嘉渡一川内線がのびている。その町道の東側に開析された標高約10m前後の畑地に位置している。この嘉渡平野は、嘉渡川の土石流や溪流のために小礫類が多く、嘉渡川の両側は、細長い水田地帯となっているが、近年、河川改修や土地改良が実施されている。遺物は、磨製石斧が採集されているのみである。

17. 里遺跡

本遺跡は、龍郷町嘉渡里410, 他にあり, 主要地方道名瀬一竜郷線より集落内へ入り, 嘉渡川よりの町道側へ県道から約200mの宅地内に位置している。遺跡は、東シナ海の沿岸に形成された小規模な砂丘地で、遺跡の範囲は宅地内のため不明である。しかし、集落内の砂丘地には、溪流や土石流のためか小礫等が多く、これらと一緒に貝類の散布も多かった。遺物は、土器小破片や多くの青磁底部破片を採集した。1～4は、青磁破片で15世紀頃の時期が考えられる。

18. 嘉渡Ⅱ遺跡

本遺跡は、龍郷町嘉渡の集落内で、嘉渡集落の東部に位置し、主要地方道名瀬一竜郷線の北側で、その隣接したところには小川が流れ、民家が1軒ある砂丘地の畑地に立地している。遺物は、奄美考古研究会員により青磁や白磁の破片が採集されている。

第7節 戸口地区

戸口地区には、アオン遺跡と平木山遺跡があり、ともに周知の遺跡である。

19. アオン遺跡

本遺跡は、龍郷町戸口字阿ヒンにあり、県道戸口一大勝線からのびる町道アヒン線の大美川にかかるアヒン橋から南東へ約900mの太平洋沿岸に形成された小規模の海浜砂丘地に位置している。遺跡地は、砂採取事業のために完全に消失し、この遺跡からは、兼久式土器、弥生式土器などの遺物が採集されている。

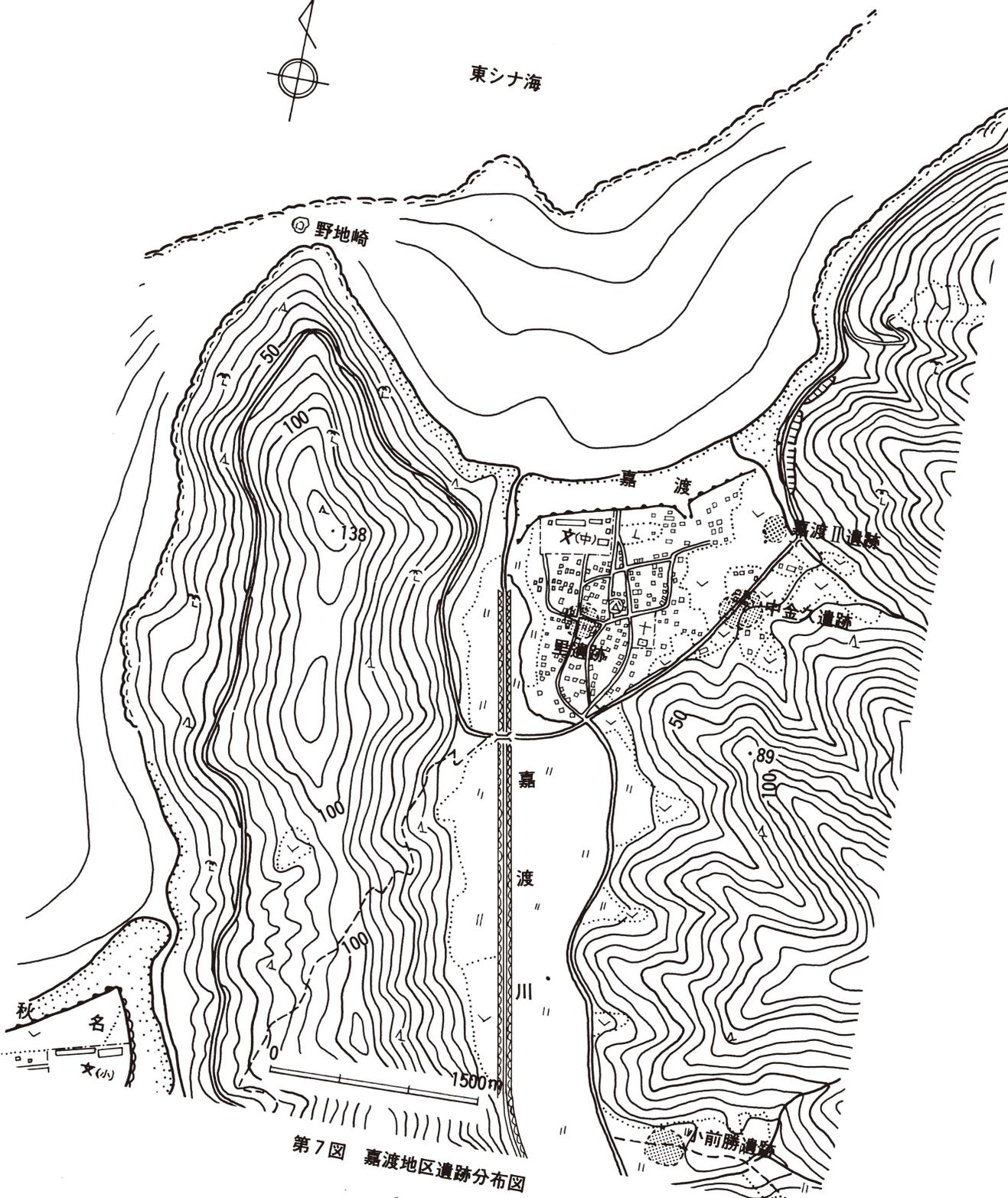
20. 平木山遺跡

本遺跡は、龍郷町戸口字上天川にあり、中戸口の集落内にある戸口小学校の北側に隣接した標高約30mのマージ層の畑地に位置している。遺跡は、昭和45年(1970)、熊本大学の松元雅明氏(当時)により発見された遺跡であり、青磁、白磁、類須恵器などの遺物が採集されている。



東シナ海

◎ 野地崎



第7図 嘉波地区遺跡分布図

第8節 浦地区

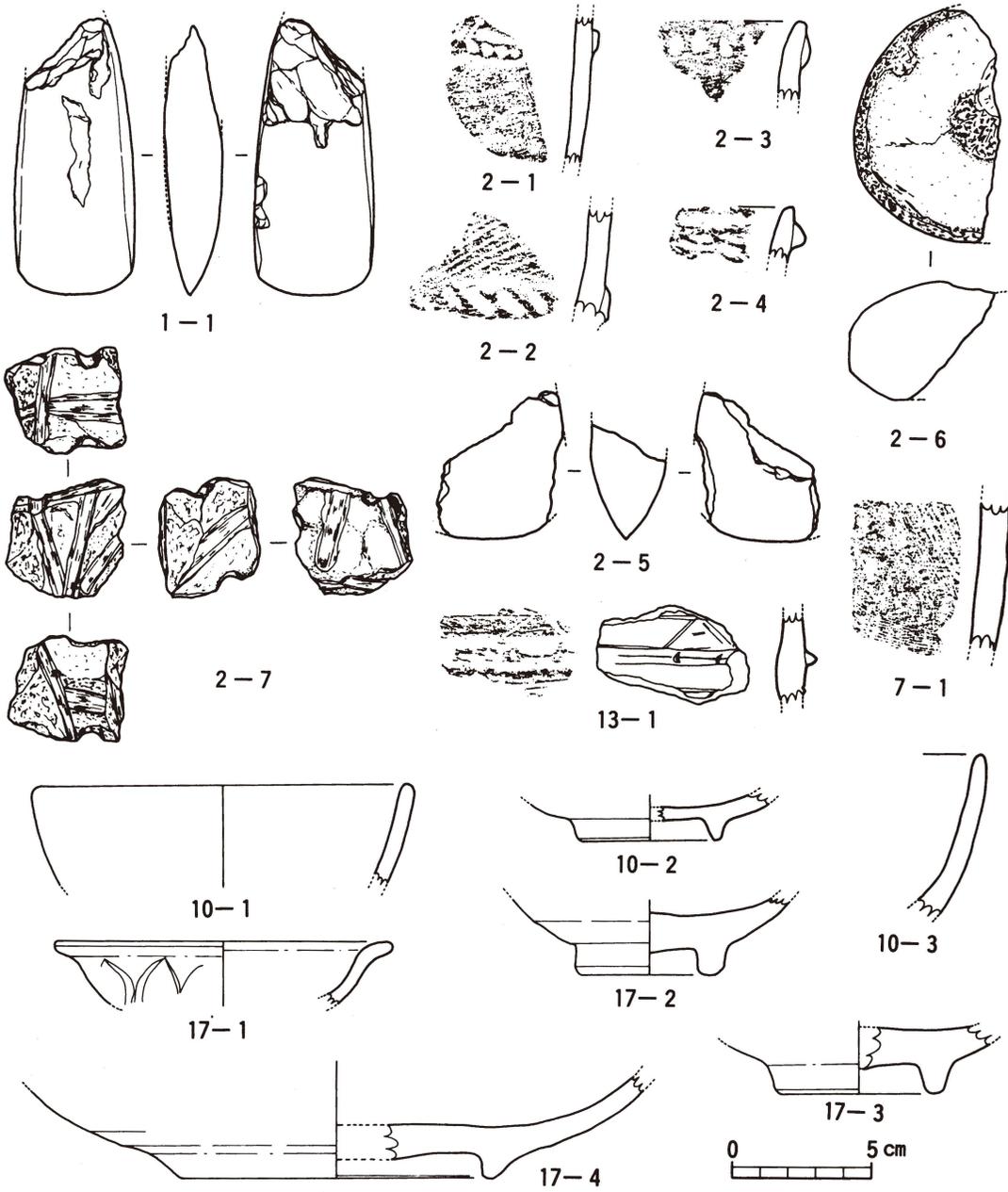
浦地区には、フージャバル遺跡があり、周知の遺跡である。

21. フージャバル遺跡

本遺跡は、龍郷町浦字上天川21-1、他にあり、本町役場より北西へ約200mのマージ層の畑地に位置している。国道58号線を基点に主要地方道名瀬一竜郷線が走り、県道の即東側は龍郷湾内の一遇を埋め立て、大島の源動力となる発電所が立地している。遺跡は、その瀬留埋立地の南西部で、母子センター北西の県道沿いの畑地にあり、畑地の断面に遺物包含層が確認され、その包含層から土器破片を検出している。遺物は、宇宿上層式土器破片であり、元町職員により発見されている。

参 考 文 献

- 注1 笠利町教育委員会「ケジ遺跡・コロビ遺跡・辺留窪遺跡」笠利町文化財報告 No 6, 1983. 3
- 注2 鹿児島県大島郡竜郷町「たつごう」 '85 町勢要覧
- 注3 鹿児島県書店組合「鹿児島県風土記 風土と文化」1982. 10
- 注4 龍郷町教育委員会「ウフタ遺跡」龍郷町文化財調査報告書1982
- 注5 龍郷町教育委員会「手広遺跡」事業報告書 1984. 3



第8図 遺跡の遺物実測図

第 4 章 む す び

本町の埋蔵文化財の調査は、6日間において実施し、周知の遺跡の再確認や新しい遺跡の発見に努めた。その結果、新たに12か所の遺跡を発見し、周知の遺跡については、その埋蔵文化財包蔵地の管理状況調査も併せて実施した。

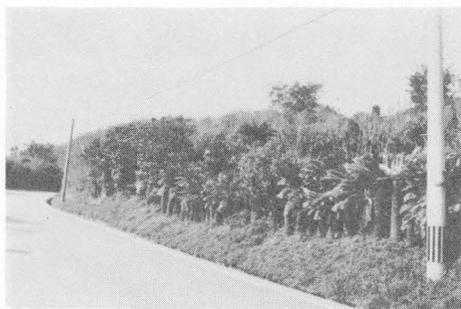
南島の遺跡は、砂丘地に立地している遺跡が多く、これらの遺跡は、砂丘地での砂採取事業による開発が頻繁に行われ消失しているのが現状である。本町の遺跡も同じように、すでに開発の影響を受けた遺跡、今からその洗礼を受けようとしている遺跡もあり、今回の調査により発見した遺跡の中にも、その影響が考えられる遺跡もある。このように、砂丘地においては、埋蔵文化財の崩壊の危険性がすぐそこまでやって来ていると言っても過言ではない。

周知の遺跡のアオン遺跡、手広遺跡、ウフタ遺跡などは、砂採取事業により消失しており、今回の調査により手広遺跡については、海岸寄りの朝ノ海別荘側にかろうじて遺物包含層を確認し、土器破片、貝類、炭化物が検出された。また新しく発見したウギヤウ遺跡は、隣接地で大がかりな砂採集事業が実施されており、その一部が今後、影響を受ける環境にあり、時間の問題である。この外、龍郷地区、円地区、嘉渡地区などの遺跡は、本町の地勢状況に制約されているためか現集落内に立地している遺跡を多く確認した。特に、龍郷地区の遺跡においては、その範囲が不明のために遺跡地の判断に苦慮したが、今回は遺物採集地点を中心に範囲を設定した。

埋蔵文化財は、序文でも示したとおり「人間だけが持つ縦とのつながり、つまり、祖先とのパイプ役を果たすもの」であり、「我々の祖先との会話ができる」のである。このように埋蔵文化財の重要性を理解して載いて、後世へ伝えていくのが我々に課せられた責務であると考えます。

今回の調査を振りかえって見れば、遺跡は、本町の地理的条件により制約され、立地しているのが現状であり、調査は、あくまでも地表面からの査察であるために不備な点が多いと思いますが、遺跡の所在を明らかにし、今後の埋蔵文化財行政の基本となるであろうことを町民の皆様様に理解してもらえることを切望してやみません。

尚、分布調査の結果は、多くの遺跡を発見したのみでなく、いろいろな教訓を得た。特に、開発と遺跡地との問題は重要な課題と言えよう。この調査に関して、協力・助言・指導して頂いた方がたに深謝の意を表したい。



1. 半川 遺跡 (南東より)



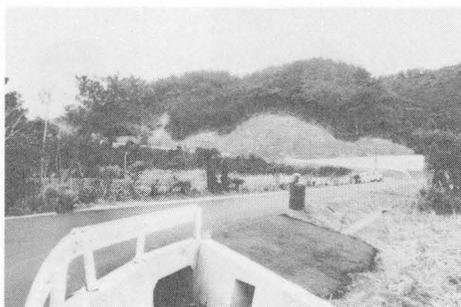
2. ウギヤウ遺跡 (東より)



3. 瀬連 I・II 遺跡 (南西より)



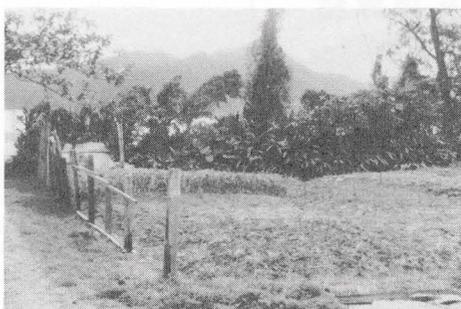
4. 瀬連 I・II 遺跡 (南西より)



5. 瀬連 I 遺跡 (北東より)



6. 瀬連 II 遺跡 (北東より)

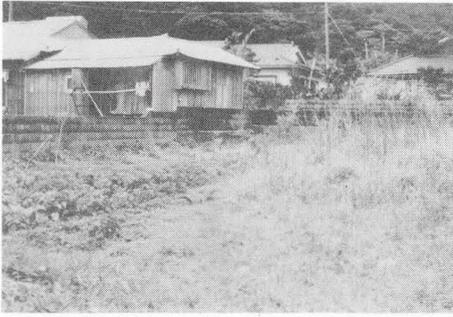


7. 前間遺跡 (東より)

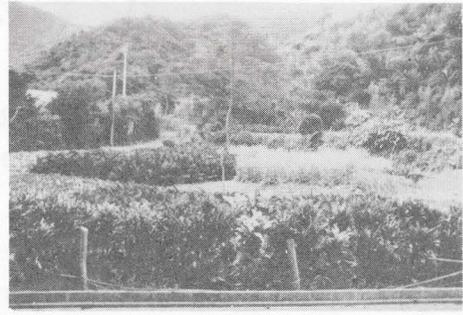


8. 白間遺跡 (南西より)

遺跡地の遠景及び近景



1. 中里遺跡 (北東より)



2. 外金久遺跡 (東より)



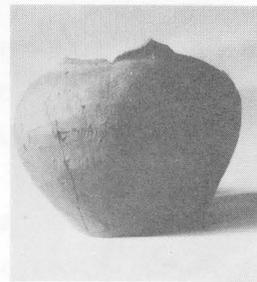
3. 三岸遺跡 (北東より)



4. 円金久遺跡 (北より) 右家：長田氏宅



5. 里 遺跡 (北東より)



①類須恵器



②磨製石斧

6. 円金久遺出土



7. 平木山遺跡 (東より)



8. フージャバル遺跡 (南東より)

遺跡地の遠景, 近景, 出土遺物

龍郷町文化財報告書

龍郷町の埋蔵文化財
分布調査報告書

昭和61年3月

発行者 龍郷町教育委員会

印刷所 有限会社 朝日印刷